

69

聖マタイの召命

劣悪な展示環境

2024

真鍋友範



《聖マタイの召命》1600 カラヴァッジョ
サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂 ローマ

1はじめに

まずは、有名なレオナルド作品《受胎告知》が、ウフィツィー美術館では、どのように展示されているのかを見よう。



《受胎告知》レオナルド・ダ・ヴィンチ　ウフィッツイー美術館

現地フィレンツェのウフィッツイー美術館でこの作品を始めて見た人なら、恐らく、以下のような疑問を抱いた筈だ。

【彼ほど有名な大画家の、しかも有名な作品が、何故このような壁面左角に展示されているのか。有名な画家の作品だから、壁面中央付近の位置に堂々展示されるのが適当ではないか。】

一般論としては、私も全くその通りだと思う。

仮にあなたが絵画を描き始め、どこかの団体展に入選でもして、喜び勇んで会場に出かけたところ、自分の作品は、壁面の片隅の位置にあったとしたら、正直ガッカリするのではないだろうか。

【一般的には壁面中央位置が、展示位置としては特上席なのだ。】

しかし、以下の理由を知ると、恐らく納得できるはずだ。

レオナルドは、特定の個人からこの作品を依頼されたいが、【この作品が室内奥の特定の場所から見て、壁面左側壁面に掲示されることを、予め知った上でこの作品を描いたらしい】のだ。

つまり、【右斜め前から見ることを前提に、この受胎告知は描かれた】というのだ。

《受胎告知》では、デッサン・構図上、様々な表現上の破綻が発見されたという。

具体的には、正面から見た場合、【マリアの右腕が複雑骨折したように見える】とか、【石製の書見台が、マリアから離れすぎている】、【聖母マリアの背景の壁の張り石のラインと窓のラインが重なって見える】などのデッサン上の破綻があるのだ。

これを、作品の右斜め前から見ると、それらのデッサン上の破綻が解消される、と判断されているのだ。

それゆえに、ウフィッツイー美術館では、鑑賞者が《受胎告知》を、正しい位置から鑑賞できるよう配慮され、誘導的に壁面隅に展示されている。

* 以上のイタリア側研究者の《受胎告知》解析に私は同調できる。

* 以上参考：レオナルド・ダ・ヴィンチ受胎告知—海にそびえる山—DVD：

Art Media Studio 2007

【絵画はやはり正しい位置から鑑賞すべきなのだ。】受胎告知は正しい展示環境を得ている。

2 《聖マタイの召命》の展示状況

一方、ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂、コンタレッリ礼拝堂にある【《聖マタイの召命》の展示状況は、真逆の最悪展示状況にある。】

【そもそも、正しく内容が読み取れる位置に作品が配置されていないのだ。】

本来なら、真正面からこの絵画を鑑賞したいと願いたい、狭いコンタレッリ礼拝堂は礼拝堂の前には柵があり、真正面には侵入できないような鑑賞システムなのだ。



サン・ルイージ・デイ・フランジ聖堂コンタレッリ礼拝堂の
三部作品展示状況・《聖マタイの召命》（左側）

* 鑑賞者は、左側約45度斜め下から見上げる。異様な鑑賞角度と位置だ。

* 正面からの図版と見比べて頂きたい。印象が随分変化する。

* 見えない部分が沢山ある。描画内容の真相が闇なのだ。

3 この位置から見ることで生じる数々の問題

- 1 まず、作品の周囲が照度不足。現在はどうなっているか知らないが、以前は小銭を投入すると数分間だけやや室内空間が明るくなり、鑑賞を助けていた。しかし、それでも細部を見るに充分でない。
- 2 【ヒゲ男の立てられた親指】の意味に全く気づかず、ヒゲ男の人差し指の方向のみに関心が向く。つまり、親指が【二段階身体動作によるイエスへの質問ポーズの出発点】であることに気付けない。
- 3 【イエスの左手や、左に踏み出した右足がよく見えない。】これは特に重要な問題点だ。その結果として、見る側の意識にイエスの細かい身体動作への関心が起こらない。

この、イエスの連続して生じた身体動作が、【三段階の、連続で起こった回

答を示す身体動作であることに気付かない。】

【単純な、イエスによる右手の指差しポーズと誤判断する】ことにつながる。

- 4 【近くに見える人物を、重要な主役と誤解する。】つまり、うつむいた若い収税人が、主役でもないのに、異常にクローズアップされてしまう。
- 5 【眼鏡の収税人の頭頂部には父なる神からの導きの光点がある】が、これも無視されてしまう。この写真にあるように、礼拝堂の西側の高窓からは光が差し込むことをカラヴァッジョは計算し、その光の中に秘められた一条の父なる神から届いた点光としたカラヴァッジョの配慮も、暗くて、左下からは見つけづらい。
- 6 総じて、【斜め下から見上げることで、バランスよく全体のストーリーを読むことを困難にしている。】

4 正しい鑑賞展示への打開策はあるのか。

難しいが、あるにはある。

まず、【同じ大きさの画面を作り、通常のように、正面中央部から眺められる状況を作れば良い。】

5 実現方法

- 1) 同一サイズの複製絵画を作成し、そちらは元のコンタレッリ礼拝堂に展示し、【本物はローマ市内の美術館に展示する。】このことで、【本来の正面からの鑑賞が実現】し、【《聖マタイの召命》の真のストーリーが浮かび上がる。】
- 2) 同一サイズの複製画を展示するスペースを、サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂近くのローマ市内の別の場所に設ける。同時に他のカラヴ

アッジョ複製作品も、同時に全て複製で見られる場所を作る。

【カラヴァッジョ研究の聖地】が実現し、世界から研究者も集まり、サロンを形成する。カラヴァッジョ研究の場となり、同時に、ローマの新しい観光地になる。美術館のような堅苦しい空間ではなく、誰でも自由にカラヴァッジョを語れる空間だ。作品に触れても良い。四国徳島の大塚国際美術館の転写作品が参考になるだろう。

- 3) 実寸《聖マタイの召命》をプロジェクション投影した企画室を用意したカラヴァッジョ展を美術館が企画する。

【コンタレリ礼拝堂の《聖マタイの召命》を、現地同様の角度から見られる展示】、と【カラヴァッジョが描いたのと同じ正しい正面位置で鑑賞できる作品展示】を併設し、同時に両作品の差異を比較鑑賞体験できる企画を提供する。】

- 4) 展示位置を、《聖マタイと天使》と置き換えて展示する。

カラヴァッジョは右上の高窓からの光を意識してこの作品構図を決めたのであろうが、あえて作品への理解を高める為であるが、隣の作品《聖マタイと天使》と置き換えた展示を試みて欲しい。

スペースが許すなら、真正面から作品を鑑賞できる。ただし展示スペースの照度は上げるべきだろう。

こうすれば、作品理解に重要な、イエスの左手も、イエスの右足も見えるのだ。

- 6 正面からの鑑賞で、何が分かるか。

瞬間的に、画面に描かれた全体像が、残さず目に飛び込む。

- 1) ヒゲ男は、ただ単純に指差したのではない。親指が立っている。つまり、2段階の質問動作だ。『お探しの人は、私ですか、それとも隣のメガネの収税人ですか』と読める。(図版：ブルーラインの1・2)

ギャングごっこをする子供じゃあるまいし、【ピストルマークで指差す大人

はない】のだ。親指を無視してはいけない。

2) イエスの動作がよくわかる。

力を込めないイエスの廻した右手だけではなく、質問の受容を表すイエスの左手の様子、イエスの視点移動を示すイエスの右足の様子もよくわかる。



2 1
ヒゲの男
2段階の質問動作 1・2

5 4 3
イエス
3段階の回答動作 3・4・5

この結果として、呼ばれたのは、ヒゲの男の向こう側の人物であるマタイ

つまり、机に寄りかかった（立っていない）メガネの収税人・マタイが、初めて、読み取りと同時進行で、観衆の前に浮かび上がる。

では、改めて、カラヴァッジョが創作した全体のストーリーを再現しよう。

収税所の窓を通してマタイを見たイエス一行は、玄関側に回り、収税所のドアを開けた。

突然のイエス一行の入室と視線を感じた納税者の一人であるヒゲの男は、イエスに向かって二段階の身体動作で質問した。

『お探しの人は、私ですか、それとも隣のメガネの収税人ですか』

質問を受けたイエスは、左手を開いてヒゲの男に掌を見せ、質問を受容する意思を伝えた。

次に一步左側に右足を踏み出して、自身の視点を横に50センチほど移動させ、呼び出し対象者（マタイ）の顔が見える位置腕あるに移動した。

そうして、三段階目の身体動作として、右腕を廻して、向こう側の人物を呼んだ。

（収税所の西側の高窓からは、この時父成る神からの一条の光が、マタイの頭頂部を点光となり、イエスを導いていた。）

『私に従いなさい』

この言葉を聞いたマタイは、即座にイエスの手の仕草と視線から、自分が呼ばれたと理解し、机に手を置いた姿勢から立ち上がり、疑いなく無言でイエス一行に従った。（注：マタイは椅子から立ち上がった、とは書いていない筈。）

7 現在の展示状況が放置された場合

確かに従来の説に立つ旧二説の支持にとって、現状判断を変えることは死活問題に違いない。

現地公式ガイドさんや、旧説を唱えていた美術史家は、面目を失うからだ。

行動パターンは、当然【無視】し、新説の存在を認めないという行動だろう。

しかし、科学の世界では、この変革が嵐のように起こり続け、数年後にはもう役立たないものになることは普通に起きているのだ。なぜなら、変革によって人類はより良い世界を享受できることになるからだ。

我々人類は、絶え間ない向上心を持って、破壊と創造を繰り返してきたが、これは受け入れるべき運命だ。

納得できるならば、堂々と理解できる内容を公表し、自説を転換させても恥ずかしくは無い。

狭量な自己保身に走れば、返って、その反動は巨大になると認識されるべきだ。

特に、これまで世界中に誤ったカラヴァッジョ情報を拡大し続けたローマ・カトリック教会こそ、その世界的宗教団体としての高見識を、世界に公開すべきでは無いのだろうか。

17世紀のバロック時代を生きたカラヴァッジョは、ローマ・カトリック教会の為に渾身の大作を創成し、カトリック教会の活動に貢献したでは無いか。

次は、ローマ・カトリック教会の側が、無念にも客死したカラヴァッジョに対し、当時のカトリック教会への貢献に感謝し、真実の絵画内容を、改めて世界中に広報すべきでは無いか。

そうすれば、聖マタイの召命がサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂に掲示された当時の大反響が、再びローマの地で発生するに違いない。